

● 学力向上、非認知能力 ●

自分に向き合い自分を高め、郷土に誇りを持つ 子どもの育成

～非認知能力の向上と城西郷土学習の実践を通して～

岡山県 津山市立西小学校（校長 尾崎文雄）

- ①教師の児童を見取る力、実態把握
- ②振り返りの積み重ねと教師のフィードバックで価値づけ、認めて伸ばす
- ③学校教育目標と関連させた行動指標の作成
- ④地域財産や行事を活用して郷土を誇りに思う児童を育てる

【はじめに】

本校は、津山市西部、城西地区に位置している。津山城西下町である城西地区の町並みは、古い歴史を感じさせる建造物が多く残っており、2020年には、国の重要伝統的建造物群保存地区に選ばれた。江戸時代、津山藩を治めていた森家や洋学者の宇田川玄随（うだがわ玄随）、箕作阮甫（みつくりげんぼ）といった歴史にゆかりのある人物とも関わりの深い寺社や建物がある。また、「城西まるごとフェア」や「まちの寺子屋」といった地域独自の行事や生涯学習の取組も活発に行われている。

児童数 187 名の小規模校であるが、休み時間には学年を超えて一緒に遊んだり教科

や学校行事、縦割り班などの活動に関わったりしており、つながりを持ちながら過ごしている。また、素直で前向きな児童が多い。通級指導教室もあり、津山市内外の特別支援教育の中核としても機能している。



◆運動場から見た校舎

I 研究の概要

1 研究主題設定の理由

(1) 児童の実態から

本校では、年度末の校内研修で児童の実態と次年度めざす学校像・子ども像について話し合っている。令和3年度末に教職員から挙がった児童の実態と願いは以下の点である。

①自分のよいところが見つからない・自己肯定感の低さ

→自分のよさやできることを増やして自信のもてる子どもにしたい。

②言われたことはきちんとやる素直さ・前向きさはある。

→さらにレベルアップするために、物事を自分事としてとらえ、主体的に考え行動する子どもにしたい。

③児童アンケート「自分の地域は自慢できる。」肯定的回答は50%

→行事に参加するが、どんなものがあるのか知らない児童が多い。地域のことを知る機会が必要。

上記をふまえ、本年度の研究は教科研修に加え、非認知能力を高め、郷土を誇りに思う心の育成を目指した研修も行った。

(2) 非認知能力の育成

本校の目指す児童像は「学びに向かう子」「思いやる子」「たくましい子」である。学力の向上だけでなく、非認知能力の育成の両輪で教育活動を行うことで目指す児童像に近づくことができるのではないかと仮説を立てた。

近年、非認知能力という力が注目されている。非認知能力とは、意欲や自信、気持ちのコントロールや切り替え、我慢強さ、コミュニケーション力といった力のことである。テストで数値化できる認知能力に対して、非認知能力は数値化することはできないが、自己形成をしていく上で必要な力である。自分と向き合う・高める・人とつながる力を高めるために、授業や特別活動、学校行事で実践を行ってきた。また、2021年度から中山芳一先生（岡山大学）を招へいし、指導いただいている。

(3) 郷土を誇りに思う児童の育成

本校の総合的な学習の時間は郷土学を中心に行っている。全体の名称を『じょうさい』として、今年度からどの学年も郷土学を中心に行っている。総合的な学習の時間の全体計画と各学年の年間計画を見直し、計画を立て行った。

2 研究方法

「自己肯定感を高める」「主体的に考え行動できる」「城西のまちに誇りを持てる」児童の育成のために、以下の研修計画で行った。

【非認知能力の研修計画】

5月

児童の実態把握（弱みと強み）

夏季研修

取組交流と行動指標づくり

2・3学期

非認知能力育成を取り入れた授業・特別活動・学校行事の実施と校内研修での振り返り

3学期末

行動指標の見直し・成果と課題

新しい学年になり、担任も児童の実態がつかみやすくなった5月から非認知能力の研修をスタートさせた。クラスごとの取組だけでなく、低・中・高学年の2学年合同での取組も計画した。定期的に全体で集まって振り返り、次の取組を考える時間を取った。

【郷土学『じょうさい』の研修計画】

4月後半

講師を呼び城西地区について知る年間計画の作成

夏季研修

1学期の学習の振り返りと年間計画の見直し・修正

フィールドワーク

2・3学期

年間計画に沿っての活動と見直し

系統的な活動となるように、総合担当と担任を中心に年間計画を見直し、活動を行った。城西地区には、城西まちづくり協議会という組織があり、城西まちづくり協議会事務局長であり、本校の地域コーディネーターも務めてくださっている佐々木裕子氏にも協力をいただいた。

Ⅱ 研究の実際

1 非認知能力育成

(1) 児童の実態把握

5月前半の校内研修で本校の児童の実態把握を行った。学習面、生活面の弱みと強みを出した。また、各学年で弱みの部分にアプローチした取組も考えた。

本校の児童の実態として、自分に自信がもてず自己肯定感が低いことや、自分事としてとらえることができず、どこか人頼みな部分があるという点が挙げられた。本年

度の非認知能力の育成の目標として、「主体的に物事に取り組む子」とした。

【下学年（1～3年生）】

【強み】

- ・ほめられたい気持ちが強く向上心がある。
- ・素直な子が多い。
- ・あいさつがよくできる。
- ・困っている人がいると助けてあげている。

【弱み】

- ・「私だけを見て。」という思いが強い。
- ・ゆずりあう気持ちがまだ育っていない。
- ・集中力が続かない。
- ・手や足が出てしまう。
- ・自分の気持ちを言葉で伝えられない。

【これからの取組】

- ・大人が子どもの間に入って子ども同士をつなぐ。
- ・自分自身を振り返る時間を作る。
- ・異学年交流
- ・認める・ほめる

【上学年（4～6年生）】

【強み】

- ・明るく素直。
- ・男女の仲が良い。
- ・「やろう！」となると一致団結する。

【弱み】

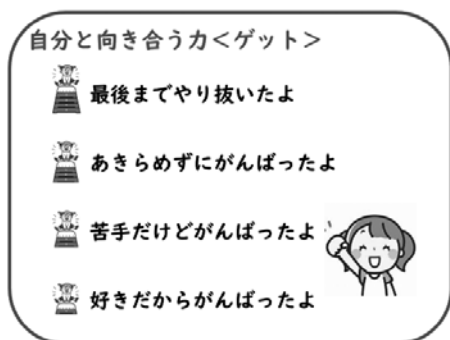
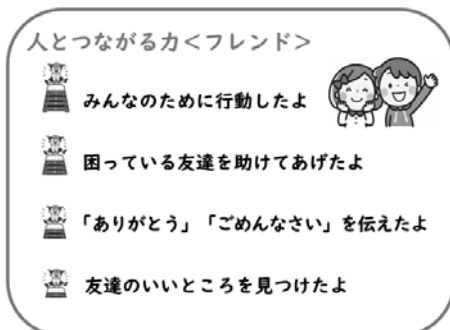
- ・アピール力が少なく消極的。
- ・ミスやハプニングを恐れる。
- ・自分の感情をコントロールしにくい。
- ・不安で自分の考えを伝えにくい。
- ・誰かがしてれると思って待ちの姿勢になっている。

【これからの取組】

- ・高学年の委員会活動で5年生と6年生の話し合い活動を取り入れる。
- ・お楽しみ会といった学級活動で、児童が決定・できるだけ児童主体で実行、教師も一緒に反省をする。

(2) 行動指標の作成

夏季研修で3つの力「自分と向き合う力」「自分を高める力」「人とつながる力」を高めるために、3つの力に沿った目指す具体的な行動を考えた。



◆始業式での説明スライド3枚

行動指標は、よりよい行動を習慣化するために、学校教育目標や目指す児童像といった抽象的なものを具体的な行動に下ろしたものである。教職員はもちろん、児童も見て分かるものが望ましいとされている。学校教育目標や児童の実態把握での研修をもとに、行動指標を作成した。行動指標は児童にも伝えやすいように児童が分かる言葉にしたり、行動レベルが視覚化されるようにイラストをつけたりして、2学期から使用できるように各教室に掲示をした。また2学期始業式に生徒指導担当から、「西小の新しい取組」として説明をした。

(3) 学校行事で非認知能力を伸ばす

行動指標をもとに、運動会の練習期間中の振り返りカードとして「ジャンプアップカード」を作成し全学年で行った。

児童の自己評価と教師からの評価を行うことで、児童の自己肯定感を上げたり、主体的な子どもの育成につなげたりすることができることをねらいとした。

【方法】

- ①各自またはクラスで「今週のめあて」を決める。
- ②帰りの会までに、練習中にできたと思う項目についてカードに○をつける。
- ③担任は毎日チェックをする。
(スタンプや一言コメントなど)
- ④運動会終了後には、カードに担任がコメントを書いて児童に返却する。

運動会ジャンプアップカード ()年()番 名前()

9/5~9/9

今週のめあて

項目	5日(月)	6日(火)	7日(水)	8日(木)	9日(金)
チャレンジ					
グット					
フレンド					



◆ジャンプアップカード

【成果】

- ・ただ練習するよりも、自分でめあてを考えて取り組んだことで、児童の取り組む姿勢や動きが変わった。学年が上がるにつれて「やらされている」感が薄くなり、自分たちで振り付けを考えたり声をかけあって行動したりしていた。
→自己意識化
- ・「できていないところには×」ではなく、「できたところに○しよう。ちょっとでもできたらそれも○だよ。」と前向きな振り返りにしたことで、翌日の練習にも前向きに取り組むことができた。
→「できた」の積み重ね
- ・本校では、低・中・高学年に分かれての表現の演技があるため、2学年合同で練習に取り組むことが多かった。下の学年に教えたり、上の学年の手本となる姿を見たりすることで、責任感や協力することの大切さを児童が学ぶことができた。
→異学年交流のよさ

運動会終了後の校内研修で、下学年と上学年に分かれて運動会の振り返りを行った。

下学年 (1~3年生)

【取組 (めあて)】

- 1年：時間を守る・教え合い協力する。
- 2年：合言葉『いっしょうけんめい』する、『工夫』してする、『協力』してする。
- 3年：(4年生との合同練習で)副リーダーを中心に教え合う。

【成果】

- 自分と向き合う
 - ・転んでもあきらめず最後まで走った。
 - ・自分でめあてを決めて取り組んだ。
 - ・暑い中でも取り組めた。
- 自分を高める
 - ・休み時間にすすんで練習した。
 - ・家でもリレーの練習をした。
- 人とつながる
 - ・協力してがんばった。勝ち負けよりも大切だと思った。
 - ・友達のがんばる姿を最後まで応援した。

上学年 (4~6年生)

【取組】

- 4年：「わっしょい津山」の踊りを3年生に教える、2学年合同顔合わせをする。
- 5年・6年：高学年集会(顔合わせ)をする、係の仕事、6年生は5年生に踊りを教える。

【成果】

- 自分と向き合う
 - ・毎時練習後の振り返りとめあてをもった取組をしたことで、自分に期待ができるようになった。
 - ・一生懸命にすることの大切さを学ぶことができた。

○自分を高める

- ・自分のやる気が上がった。
- ・責任をもってできるようになった。
- ・高学年のソーラン節を4年生が見ることで、4年生の意識が高まった。また、高学年もモチベーションが上がった。

○人とつながる

- ・前向きな言葉が増えた。
- ・他学年や全校のために行動できた。
- ・係の仕事で異学年とつながることができ、協力もできた。
- ・本番の子どもたちの姿を保護者が見ることで、子どもの思いが保護者に伝わった。



◆高学年の表現



◆中学年の表現



◆低学年の表現

(4) 6年生主体の「西フェス」

6年生が卒業前に1～5年生を招待し、縦割り班で回りながら6つのブースで遊ぶ「西フェス」を開催した。

2学期後半から計画・準備をして進めてきた。児童が作成した企画書を職員会議で協議し、教職員の意見を児童に返して実現させた。城西地区の祭り「城西まるとフェア」で地域の人にしてもらったことを学校でもできないかという発想と、卒業前に全校で交流し、みんなで楽しい会をしたいという思いから取り組んだ。5年生のときにはコロナ過のため、6年生を送る会や1年生を迎える会を企画・運営していないため、全校を動かす行事は今回が初めてだった。6年生児童の振り返りである。

みんなで協力して、休み時間も頑張った。本番、たくさんのハプニングがあったけど係じゃない人が手伝ってくれた。今後はハプニングがあった時でもどう対処するか、どうしたらよいかを考えるようにしたい。

低学年に教えられて、ボーリングでストライクを教えてあげられたことが心に残りました。助け合ったらできるということを知った。

西フェスが始まる前にみんなで円陣を組んだことが一番思い出になった。みんなで一つのことを頑張ってきた感じがした。それと、みんなで「世界中の子どもたちが」を歌った時に肩を組んで歌った時に楽しかったからです。

Nちゃんが、「ピンチはチャンスじゃけん、がんばろう。」って言ってくれたのが心に残りました。これからの生活でも、どんなピンチでもチャンスに変えるつもりで、この経験を生かしていきたいです。



◆西フェスの様子①



◆西フェスの様子②

(5) 来年度に生かす行動指標の見直し

2月末の校内研修で、行動指標の見直しを行った。




見直しのポイント

- ①行動指標をどのように使ったか。
 - ・レベル1から積み上げていく（段階型）。
 - ・レベル関係なく、ねらいに合わせて12項目から選ぶ（並列型）。
- ②4つのレベル段階をもとに取り組んでみてどうだったか。使いやすさや縦のつながりはどうだったか。
- ③学校教育目標とつながっているか。
- ④児童にも分かりやすい行動や言葉で示されているか。

夏季研修で作成した行動指標は、段階型にしていた。実際に使ってみると、「今日のねらいはこれ。」と、段階関係なく項目を選んでめあてにしたという感想が多かった。そこで、段階型ではなく並列型に変更し、それぞれの力に合った具体的な行動を考えることにした。学校教育目標に合わせて、見出しを「たくましい子」「学びに向かう子」「思いやる子」と変更した。下学年と上学年の部会に分かれて話し合い、全体で交流して修正版が完成した。



◆校内研修の様子

		
向き合う	高める	つながる
目標をみつけたよ	目標に向かって挑戦したよ(最後まで)	みんなのために行動したよ
できることをみつけたよ	できることに挑戦したよ	誰かのために行動したよ(協力・助ける)
苦手なことに気がついたよ	苦手なことをがんばってみたよ	おわびや助けてほしいことを伝えたよ
好きなことに気がついたよ	好きなことをがんばってみたよ	友達のいいところや感謝を伝えたよ

◆行動指標 (修正前)

		
たくましい子	学びに向かう子	思いやる子
最後までやりつづけよう	自分の考えをもとう	話し合おう
まずはやってみよう	もっとチャレンジしよう	協力し合おう

◆行動指標 (修正後)

2 郷土を誇りに思う児童の育成

(1) まずは教職員が地域を知る

郷土学をするにあたって、子どもたちに教えるには、まず自分たちが地域のことを勉強して知る必要があると感じた。城西地区には18か所の寺社や、明治時代から残っている建造物がある。そこで4月の校内研修では、城西まちづくり協議会の佐々木裕子氏に来ていただき、城西地区の歴史や特色についての講義を受けた。また夏季研修では、実際に城西地区内を案内してもらい、説明を聞きながら文化財や寺社を巡るフィールドワークを行った。



◆城西フィールドワーク

(2) 城西まるとフェアへの参加

昨秋、3年ぶりに城西地区の祭り「城西まるとフェア」が開催された。

本校も、「城西まると博物館フェア絵画」に取り組んだ。自分たちの住んでいる城西地区にある建物・町なみ・人々を絵にするものである。全校児童が応募し、作品はフェア当日に会場に飾られ、表彰式も行われた。

また、6年生が「城西子どもガイド」として参加した。1～5年生は地域学習の取組を模造紙にまとめ、フェア当日に6年生が代表で各学年の取組についてステージ発表をした。低学年は、まち巡りや地域の方との昔遊び交流について、3～5年生は総合学習で取り組んでいることを紹介した。児童が地域で学んだことを自分たちで地域へ発信することで、地域の方をはじめ、城西地区を訪れた人たちにも関心を持ってもらうことができた。

【各学年の取組内容】

- 1年生：昔遊び交流会
- 2年生：まちたんけん
- 3年生：作州がすり体験
- 4年生：城西地区のSDGs
- 5年生：地域のまちおこし
- 6年生：全体発表



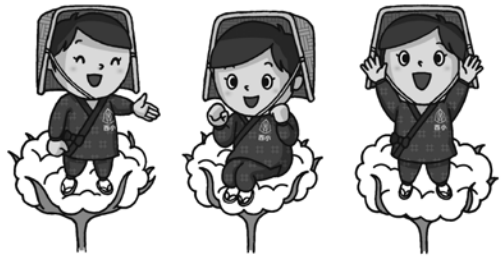
◆城西まるごとフェア

(3) 城西地区にちなんだ西小マスコットキャラクターの作成

委員会活動の中の運営委員会の児童が「西小マスコットキャラクター募集」の提案を行った。各委員会代表とクラス代表が集まって行う代表委員会で協議されたのち、全校に提案した。「西小学校や、学校がある城西地区にちなんだもの」というテーマで全校児童に呼びかけた。そののち、運営委員会の児童が集まったすべてのキャラクターに目を通し、その中から6つのキャラクターに絞られ、Google formを使って全校投票を行った。投票の結果、「かすちゃん」に決定した。決定したキャラクターを様々な場面で使うことができるように、デザイン業者に依頼し、修正を行いながらデータ化して完成させた。また、非認知能力の3つの力に合わせて、3種類のポーズのかすちゃんを作成した。

どの児童も意欲的に取り組み、「西小学校、城西地区と言えば」と地域のことを考えながら取り組むことができた。また、「全校投票をしてキャラクターを作りました。」で終わらせるのではなく、かすちゃんを消しゴムはんこにしたり、メッセージカードに添えたりして実際に活用した。全校で決めたキャラクターなので、どの学年にも浸

透させることができた。



◆西小キャラクター「かすちゃん」

西小キャラクター「かすちゃん」

- ・衣装は城西地区内で作られている津山の工芸品である綿織物「作州がすり」。
- ・頭のかぶり物は、同じく工芸品である「竹細工」のかご。
- ・作州がすりの原料である綿花に乗っている。
- ・中性的なキャラクターになるよう、髪の毛の長さ色も工夫した。
- ・ポーズは3種類。手を差し伸べるかすちゃん（つながる）、挑戦するかすちゃん（高める）、「がんばったよ」と両手を上げるかすちゃん（向き合う）。

Ⅲ 研究の成果と課題

1 子どもに任せてみる

今年度の教育活動は、「児童が」教え合ったり、企画をしたりする場面が多く見られた。各学年でも、児童が主体となって学級活動を進めることが増えた。自分たちが考えたことが実現できたとき、児童は「やってよかった。」という達成感や、「もっとこうやってみよう。」「これができるようになった。」「次はこうしたい。」と自分自身の成長に気付き、次の意欲へつなげることができたと考える。

また、城西まるごとフェアをきっかけに、

「総合学習で城西地区の〇〇を調べたい。」と言った声が聞かれるようになったり、城西地区にちなんだ西小のキャラクターが考えられたりした。児童の「やってみたい」という思いが郷土学にも反映されつつある。

2 振り返りの習慣化

振り返りは、自分自身を客観的にとらえ言葉にする力を必要とする。運動会で使用したジャンプアップカードは、「できたと思うところに○をする」ため、言語化まではしていない。振り返り方が簡単で、短時間で振り返りがしやすいというよさはあったのではないかと考える。運動会が終わったときに全体の振り返りをするのではなく、毎時間の練習はどうだったかを振り返ることで、練習を真剣に取り組んだり、みんなでよいものにしようとする意識が全体的にあった。また、「明日はこうしよう。」と振り返ることで次の練習目標ができた。運動会当日は達成感であふれた児童の姿を見ることができた。

さらに、児童の振り返りの中にある、その子のよさや頑張りを教師がコメントや全体で紹介して価値づけることで、児童の自信にもつなげることができたと考える。児童の行動を価値づけ、フィードバックするためには、教師の児童一人一人や学級集団を見取る力（実態把握）も必要となってくる。学級の現状をとらえ、目指す姿を明確にさせること、児童の様子や表情、行動の背景を読み取ることで、さらによりよい行動へと強化されていく。教師の見取る力をより鋭く、高めていくことが必要である。

3 教職員のベクトル合わせ

今年度の研修では、話し合うことを大切にしてきた。本校はどの学年も単学級のため、児童のことをじっくり話すことが少なかった。行動指標の作成の際に、他学年の様子や担任の思いや願いを聞いたり、学校全体をどのようにしていきたいかを考えたりすることを教職員全員で行うことができた。「卒業するまでにこんな力をつけておきたい、だから5年生でこの取組をしよう。教師はこれを意識しよう。」と次の学年や卒業までの見通しをもって取組をすることができた。同じ方向を目指して行うことの重要性を実感した。その成果の形が行動指標だったと考える。目指す児童の姿を思い浮かべながら、1枚の模造紙の周りに教職員が集まって意見を出し合ったことで、研修自体もよりよいものとなった。

行動指標は、最初に作成したものと大幅な変更となった。今までは、特別活動や学校行事を中心に非認知能力を高めるような取組をしてきた。しかし、学校生活の中で大半を占めているのは日々の授業である。特別活動や学校行事でしか非認知能力を伸ばすことができないとするのではなく、授業でも自分を高めたり、向き合ったり、友達や教師とつながったりして認知能力とともに伸ばしていくことは可能である。今回修正した行動指標を授業でどのように活用するか、来年度の課題として取り組んでいきたい。（研究主任：原田靖子）

参考文献：中山芳一

『自分と相手の非認知能力を伸ばすコツ』
東京書籍（2020）